

# 手塚治虫『火の鳥』論

——火の鳥と循環（ループ）とは何か——

小澤 知美

## 序

『火の鳥』は一九五四（昭和二九）年に『漫画少年』に掲載されて以来、一九八八（昭和六三）年までの間、手塚治虫が描き続けた漫画作品である。四〇年以上の年月を費やし、描かれた作品であるため、手塚の「ライフワーク」として位置づけられており、作者の数多くの作品群の中でも、代表作のうちのひとつとして知られている。『火の鳥』は「黎明編」「未来編」といった一〇編以上の物語から構成され、各編の舞台となる土地・世界、時代や登場人物がそれぞれ異なる。しかし、作品は一貫して、火の鳥という不死鳥が登場し、各編とも登場人物は何らかの形で、火の鳥と関わりをもつのである。火の鳥との出会いや、各編で生じる出来事に翻弄されながら、登場人物たちは人間の存在意義、生命の本質などについて考えることとなる。物語全体を通して登場する火の鳥は、時に全てを知る語り手であり、登場人物を陥れる役でもあり、反対に登場人物を救う役にもなるのである。そういった多面的性質をもつ火の鳥が見守る人間や世界は、細かな状況こそ違えども、押し並べて〈発展〉の状態から転落し〈衰退〉、もしくは〈無〉の状態となる場合が多い。最初は何もない〈無〉であったものが、力をつけて栄え、一時は頂点の

ような〈有〉を経験するが、最終的には元の〈無〉に戻るのである。つまり、唯一火の鳥だけが不動の存在で、世界は常に繰り返しの一途を辿るのである。この『火の鳥』の作品世界が一つの循環（ループ）のようで、火の鳥は循環（ループ）を見守る存在といえるだろう。

『火の鳥』と同様に生命の尊さや人間の本質をテーマとして扱うのは、『ブラック・ジャック』や『ブッダ』など他の手塚作品でも見受けられる。各々の作品を手塚治虫という一人の人間が描いたのだから、作品のテーマが共通しているのは当然のことであるが、それ以上に、『火の鳥』が漫画家手塚治虫の歩みと共に、出来上がった作品だからとはいえないだろうか。『ブラック・ジャック』や『ブッダ』、『ジャングル大帝』などの作品を描きながら、一方で手塚は『火の鳥』を描き続けてきたのである。『火の鳥』を手塚の「ライフワーク」と先述したが、手塚が漫画家として様々な作品を描いていくことで、同時に『火の鳥』という作品は形作られ、完成したのだと考える。多くの作品で訴えたテーマをより洗練させ、磨き上げた作品こそ『火の鳥』なのだ。つまり、手塚の漫画家としての人生の循環（ループ）においても『火の鳥』は重要な存在なのである。

本論文では、『火の鳥』の作品に登場する火の鳥が見守った循環（ループ）と、循環（ループ）の中の世界について論じる。火の鳥

のもつ両義性や、宗教や神話と科学の関係性などを考察していくのだが、その際テオドル・アドルノとマックス・ホルクハイマーの共著である『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』の論を用いたい。アドルノとホルクハイマーは、二〇世紀に活躍したドイツ人の思想家である。二人は第二次世界大戦中にアメリカに亡命し、『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』を書き上げた。二人はナチスをはじめとするファシズムはなぜ民衆を魅了するのか、ということをつフロイトの精神分析やマルクスの思想を関連付けて論じていたのである。一九三〇年代からの第二次世界大戦中、つまりファシズム体制が力を振るう時代とは、世界の危機的状況ともいえるだろう。『火の鳥』の各編で見られる世界や時代は、戦争や人々を抑圧した政治が氾濫しており、アドルノとホルクハイマーが生き、『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』を書いていたファシズムの時代と共通している。そこで『火の鳥』の作品世界を考えるにあたり、世界の危機的状況について論じている『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』を本論文で扱うにふさわしいと考える。このように『火の鳥』の作品世界に通ずる論文を取り上げながら、『火の鳥』の作品全体に共通して繰り返されること、循環（ループ）について論じていく。

なお『火の鳥』には、『漫画少年』『少女クラブ』といった雑誌に掲載された「エジプト編」「ギリシャ編」「ローマ編」などの作品も存在する。だが、それら初期作品は「火の鳥」というキャラクターの設定が『COM』『マンガ少年』『野生時代』といった現在広く知られている『火の鳥』の作品群とは幾つか異なる。本論文では、世界観に一貫性があり、角川文庫版『火の鳥』の一卷から一二巻に相当する『COM』『マンガ少年』『野生時代』が初出である編を対象

とする。

## 一 両義性

『火の鳥』という作品には、タイトルにもなっている火の鳥が登場する。「序」において述べた通り『火の鳥』は一〇編以上の作品から構成されており、それぞれ舞台となる時代は古代から未来まで幅広く、登場人物も完全に同一という訳ではない。だが、火の鳥だけは各物語に登場し、他の登場人物や時代、世界は火の鳥に翻弄されるかのようにして物語は展開していく。火の鳥がなぜ人の心を魅了するのか、というと「黎明編」の冒頭からウラジという人物が火の鳥を捕獲しようと試みる場面で説明している。「あいつの生き血をしぼつてのめばあの鳥が火の山といっしょにずっとずっと生きてきたように——」<sup>①</sup>「のんだものはぜったいに死なないからだになると……永遠のいのちを手にいられる」（同）などの箇所から分かるように、火の鳥の生き血は、命という〈有限なるもの〉を〈無限なるもの〉に変化させる力があるのだ。つまり、人間が「火の鳥の生き血」という対象を獲得することによって、同時に〈無限なるもの〉<sup>②</sup>「永遠の命」も得られるのである。「火の鳥の生き血」によってもたらされる「永遠の命」とは、すなわち「自己保存」であるが、「火の鳥の生き血」を手にするためには、手にしようとする人物が危険を冒さねばならない。つまり「火の鳥の生き血」を獲得しようとする者が、「自己保存」の危機に追いやられるため、火の鳥と自己の命を〈交換〉する覚悟がなければならない。「火の鳥の生き血」は「自己保存」を保障するものでありながら、同時に「自己保存」の危機

に直面する可能性を含んだものである、というアイロニーが存在するのだ。誰かの〈犠牲〉によって、〈自己保存〉への道が開かれるのである。

だが、『火の鳥』の全編を通して、火の鳥を捕らえて「生き血」を飲んだ者がいない。では、誰も「火の鳥の生き血」を手に入れてはいないのか、といえばそうではない。ヤマト・オグナは父である大君から、クマソ征伐の命令を受けクマソへ赴き、そこで「クマソの守護神」といわれる火の鳥と出会う。火の鳥を狙う他の人物達は、火の鳥を手に入れようと、弓矢や刀を用いて殺そうとした。しかし、ヤマト・オグナは火の鳥に笛の音色を毎晩聞かせて、「生き血」を獲得しようと試みた。カジカというクマソの女から「それが：：弓矢のかわりになるの？」と尋ねられても、ヤマト・オグナは「なるとも！ いまに：」（同）「弓を使わずにあの鳥をきつものにしてみせる」（同）と語った。何日か火の鳥に笛の音色を聞かせた後、ヤマト国へ戻る際火の鳥はヤマト・オグナをクマソの追っ手から助け、「あなたは私をたのしませてくれましたお礼は何がいい？」と尋ねた。そして火の鳥自ら脚を傷つけ、「さあお飲みなさい 私の生き血を！ あなたはこれがのぞみなのでしょうか？ これは一度も人間に飲ませたことがないけどあなたへのお礼のしるしよ」（同）と言い、「生き血」を差し出した。ヤマト・オグナは火の鳥から直接「生き血」を授かったのである。

この、火の鳥とヤマト・オグナの一連のやり取りは、ホルクハイマーとアドルノが『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』の二章にあたる「オデッセウスあるいは神話と啓蒙」で論じていた事柄と共通するのではないだろうか。

ホメーロスにおける贈り物は交換と犠牲の中間にあたるものである。犠牲を捧げる行為と同様、贈り物によって、他所者の血であれ海賊に征服された定住者の血であれ、流された血潮は償われて、復讐の断念が誓約されたことになる。だが同時に、贈り物はすでに等価代償の原理を予告している。(略) 主人がたとえ、もてなしに対する直接の代償を受け取っていない場合にも、こうして彼自身や身内の者が、同様のもてなしに与りうるものと期待できる。<sup>5)</sup>

ヤマト・オグナに対して火の鳥は「あなたは毎晩私に笛を聞かせてくれたわそれであなたは私に何が望みな私の生き血？」と質問する場面がある。これは「毎晩笛を聞かせてくれた」という贈り物に対する代償として、「生き血」を与えようとしているといえるだろう。ホルクハイマーとアドルノの論を用いれば、ヤマト・オグナが毎晩笛を聞かせたという行為も「交換と犠牲の中間にあたるもの」と合致すると考える。結局ヤマト・オグナは「生き血」を獲得する権利があつたものの、大君の墓の犠牲者となる人々達に生き血を与えなかったため、自らは飲まず、布に「生き血」をしみこませて国へ持ち帰った。

火の鳥の「生き血」を獲得した訳ではないが、〈永遠なるもの〉を手にした人物は他にもいる。「宇宙編」に登場する牧村五郎がそうである。彼はかつてフレミルという惑星に派遣され、そこで知り合ったラダという娘を殺し、フレミルの人々を皆殺しにした。最後に残っていた住人である火の鳥を殺そうとした時「待ってください私を撃たないでください あなたを不老不死にしてあげます」と言い、牧村に「生き血」をなめさせた。その結果、牧村は日に日に肉

体が若返り、「彼はまた育つておとなになり また若返つて赤ん坊になり これを永久にくり返します 絶対に彼は死ねな<sup>⑧</sup>」 くなったのである。永久に繰り返されるといえば、「異形編」に登場する八百比丘尼<sup>⑨</sup> 左近之介も同じである。左近之介は父に復讐するため、八百比丘尼を殺すが、左近之介は無限に繰り返される時間の中に閉じこめられることになった。

「宇宙編」の牧村も「異形編」の左近之介も、どちらも各々が犯した罪に応じて火の鳥が罰として〈永遠なるもの〉を与えている。実際に火の鳥は「宇宙編」において、牧村の若返りに関して「それが宇宙の生命をないがしろにしたものへの当然の罰だったのです」(同)と語っている。「異形編」では「だから裁きをうけるのです」<sup>⑩</sup>と八百比丘尼に説明している。この牧村と左近之介の、火の鳥との関係性と、ヤマト・オグナと火の鳥の関係性は一見すると性質が異なるように考えられる。しかし牧村と左近之介が犯した罪に応じ、罰として不死を与えられたことは、〈交換〉や〈贈与〉の原理と通ずると考えられる。確かに贈り物とは、受取る側にとって喜ばしい感情を抱かせるのが一般的である。『啓蒙の弁証法——哲学的断思想——』の第二章には以下のように論じられている。

つまり主人側はそもてなしの対価を、現物ないし象徴的なかたちとして受けとり、客人の方は路用の面倒をみてもらい、原則的には家に帰り着くことができるようにしてもらう。主人がたとえ、もてなしに対する直接の代償を受け取っていない場合にも、こうして彼自身や身内の者が、同様のもてなしに与りうるものと期待できる。

この引用箇所からも分かる通り、「同様のもてなしを与りうるも

のと期待」する、とは肯定的な意味合いでの「期待」である。ヤマト・オグナは火の鳥にとつて、肯定的な働きかけをしたことで、ヤマト・オグナにとつても肯定的な「期待」に応えるものが得られた。牧村と左近之介は火の鳥にとつて否定的な行いをしたため、それと等価である罰が下されたのである。それぞれの登場人物が起こした事柄が善悪であるかは置いて考えると、ヤマト・オグナも牧村も左近之介も、各自が起こした行動と同等の報いが火の鳥によつてもたらされたことは共通している。これらのことは、ホルクハイマーとアドルノが論じていた〈犠牲〉や〈交換〉および〈贈与〉の関係性に付随すると考えられる。

火の鳥が〈永遠なるもの〉を授けたのは、以上の三名の登場人物の他にも存在する。「未来編」に登場する山之辺マサトという人物である。ムーピーという不定形生物の彼女タミをもつ山之辺マサトは、ムーピーの取り締まりから逃れるべく、タミを連れて地上へ逃げた。その先で出会った猿田博士の研究室に匿われる。猿田博士がマサトを助けた理由というのは、火の鳥に「地球をなおせる人間はひとりしかいません」<sup>⑪</sup>「その人間はもうすぐここへ来ます！」(同)と予言されたためである。マサトがその予言でいう、「地球をなおせる人間」(同)だからなのである。マサトは火の鳥の存在を以前から知っていた訳でも、「永遠の命」を欲しがっていた訳でもない。また、先ほどの三名の人物達のように、作中において明確に不死と等価の行いをしたとは書かれていない。だが、マサトの目前に現れ「あなたはここで何千年も何万年も生きるのです また新しい人類が誕生するまで あなたは生きて見守らなければなりません」<sup>⑫</sup>「あなたはその使命をやりとげるのですよ」(同)と言う。そして一

時的にマサトは「存在」だけとなり、火の鳥に連れられ宇宙を見る。その際「人間を生みだして進化させたのにその進化のしかたが間違っていたようです」「人間を一度無にかえして生みなおさなければならぬのです」(同)「もう一度人間は新しく生まれて新しい文明を築くのですよ」(同)「その役に選ばれたのがあなたです 山之辺マサト」(同)「あなたはもう死ねません!」(同)と言われ、銃で身体を撃つても、ナイフで胸を刺しても死なない人間となった。火の鳥に選ばれた理由としては、人類戦士としてかつてムービー狩りを行ったにもかかわらず、ムービーであるタマリと密かに暮らしている、という矛盾した行動が考えられる。だが、火の鳥の口からマサトを選んだ理由が述べられていない以上、この説は推測の域を脱しない。

しかし、どの人物にも共通していることは、火の鳥がそれぞれの人々に対して、様々な役割を課しているということである。ヤマト・オグナはヤマトへ帰り、殉死を廃止し、埴輪の価値を認めさせる役割があるように考える。牧村は猿田の本心や欲望を引き出し、ナナに母性や愛の感情を見出させた。左近之介は八百比丘尼として、様々な人間や妖怪を救い続けた。そしてマサトは人間の再生を見守り続ける役割を任された。このように、四人は火の鳥によって不死、もしくは延命させられたかわりに、与えられた役割を全うする(犠牲者)となったのである。以上のことから火の鳥は(交換)という方法をとって、人間に(永遠なるもの)を与えている存在であることがわかる。火の鳥は自らの特殊性でもって、「永遠の命」を手しているように考えられるが、果たしてそうであろうか。勿論火の鳥が「永遠の命」をもつに値する存在であるから、不死でいられるの

だろう。だが、角度を変えて考えてみると、火の鳥は自らの「生き血」のために命を落とした人物たちの血によって、生きられているのではないだろうか。岡本太郎著の『美の呪力』では(犠牲)、すなわち(イケニエ)について、チチェンイツアの球戯場の壁を例に挙げ、以下のように論じている。

チチェンイツアの球戯場の壁には、首を斬り落とされた男から七匹の蛇の形で血がふき出している絵が浮彫りされている。ここで神に捧げるペロタ競技が行われた。ゴムのボールを飛ばして壁にとりつけられた環におすプレイだ。負けたチームのキャプテンはイケニエにされた。<sup>13)</sup>

この記述からペロタ競技では、負けたチームのキャプテンがイケニエにされていたことがわかる。「神に捧げるペロタ競技」で勝ったチームとは、言い換えれば神に等しい力をもつ者たちである。そのチームに負けたキャプテン、および負けたチームとは、神に負けた者たちといえるだろう。『火の鳥』の作品において、火の鳥は「生き物」つまり「宇宙生命」を内包した神のような存在である。神である火の鳥の「生き血」を獲得しようとする人々は、ペロタ競技に参加する人々と似ている。ペロタ競技は神に負けたものが(イケニエ)となる。『火の鳥』では火の鳥を捕らえられなかったものが死ぬ。ペロタ競技と同様に、死ぬことは神である火の鳥へ命を「捧げる」(同)と考えられる。『美の呪力』には他にも(イケニエ)について書かれている。

人間の血と宇宙の熱く激しい対応、循環。世界は危機的バランスの上にあり、暗黒、虚無の方がむしろ常に実体として迫ってくる。太陽が輝き、人々が生きつづけるためには、血を捧げな

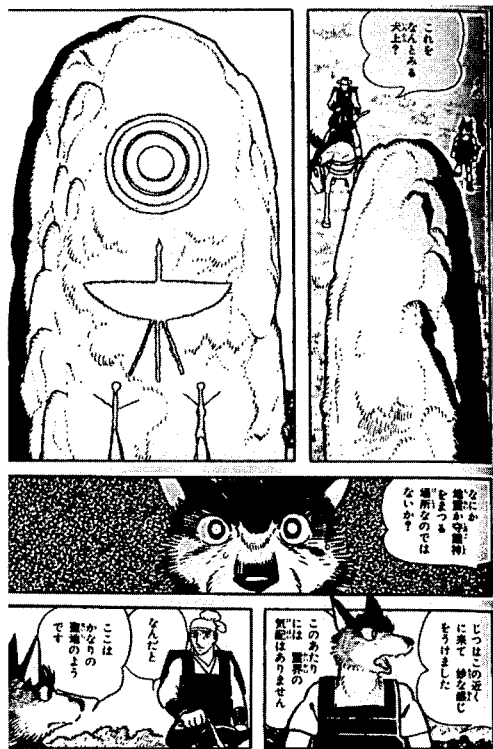
ければならない。いのちのサイクル、輪廻、その戦いに賭けるのである。太陽自身、自ら灼熱の火にとび込んだ。そして他の神々は血をもって彼にエネルギーをふき込む。正しいのだ。人間もまた歓喜をもって血をほとばしらせる。それによって宇宙をささえるのだ。<sup>14</sup>

火の鳥は、自らの「生き血」のために命を落とした人々の血によって生かされているのではないだろうか、と先述したが、この『美の呪力』の引用箇所が登場する「太陽」も、火の鳥と生きている原理が共通していると考ええる。「太陽が輝き、人々が生きつづけるためには、血を捧げなければならない」とある。「宇宙生命」、すなわち万物の生命の象徴である火の鳥が生きて、〈永遠なるもの〉である「不死」の性質を保ち続けるためには、〈犠牲〉となる〈イケニエ〉の存在が不可欠なのだ。「太陽」は、日本でも天照大神などとして、古代から人間にとって信仰の対象となされており、火の鳥の神秘性と共通する。『火の鳥』の「太陽編」の中にも太陽信仰について描かれている。

犬上宿禰「この上の丸いものはおそらく日輪をあらわしているのでしょうこれは太陽信仰のしるしですじつは私の故郷の百済にもこのような太陽神をまつる遺跡が残っているのですもちろん今から何百年も昔の人間の信仰ですその時代ではただ一つの生命の源として太陽を信仰していました<sup>15</sup>」

古代の人間がつくった、太陽への祈りの場所で犬上宿禰と大海人皇子が会話をしている場面である。ここにおいても太陽信仰の名残が感じられる。この場所のもつ力の原因を探るため、犬上が歩き回

ると火の鳥の居場所まで辿り着く。犬上は火の鳥を発見すると「なんて輝かしいんだ……まるで太陽のようだ<sup>16</sup>」と言う。それに対し火の鳥は自らを「私は太陽の使者のようなもののな<sup>17</sup>」と語る。「太陽に祈る祭壇<sup>18</sup>」の石の列には日輪の下に鳥のような絵が描かれている<sup>19</sup>。



これは「太陽の使者」である火の鳥の姿であると推測できる。『美の呪力』には以下のようにも書かれている。

太陽は生命の凝縮、エネルギーの塊である。しかし血と生命を捧げないと死んでしまう。それはむしろ経済原則だ。エネルギーを補う。与えて、つかみとる。ルールである。ふんだんに放出し、世界に与えつづける。それに対して、こたえなければならぬ。もしこたえなないと、太陽の生命は衰弱し、消えてしまう。(略)

与えられるものを受身に貰うというのではなく、自らアンガー  
ジェするのだ。イケニエの儀式はそれを確認する。そして宇宙  
全体、人間をひっくるめて更新するのである。<sup>19)</sup>

『火の鳥』の作品中で示されている通り、人間にとつての「太陽」  
と火の鳥の存在と相通するものがある。「太陽は生命の凝縮であり、  
エネルギーの塊ということは、火の鳥が「宇宙生命」<sup>コスモソート</sup>を内在してい  
ることと等しい。火の鳥が「太陽」のように「永遠の命」として生  
き続けられるのは「血と生命」という〈犠牲〉・〈イケニエ〉が火の  
鳥の高貴な神聖に応えようとしているためだと考える。『火の鳥』  
の作品内で火の鳥の「生き血」を獲得するために命を落とした人物  
たちは、自らが〈犠牲〉・〈イケニエ〉になることを期待しているわ  
けではない。むしろ「生き血」を獲得して、同時に〈永遠なるもの〉  
を手になしようと目論んでいる。火の鳥にしても人間や生物に期待し  
ている。

火の鳥（心情） 人間だって同じだ どんどん文明を進歩させて

結局は自分で自分の首をしめてしまうのに

「でも 今度こそは」と火の鳥は思う

「今度こそ信じたい」

「今度の人類こそきつとどこかで間違いに気が  
ついて…」

「生命を正しく使ってくれるようになるだろう」  
と……<sup>20)</sup>

この箇所から火の鳥は自分の「生き血」を求め、命を落とすこと  
自体に無意味さを感じているのがわかる。火の鳥が人類を信じたい  
という希望も、人類の争いなどによって脆くも崩れてしまう。火

の鳥の希望とは反対に「生き血」を求める人や、生き血を求めて命  
を絶やす人が多いほど、火の鳥の「高貴な神聖」はさらに高まるの  
だ。自身の性質によって火の鳥は「永遠の命」が備わっているのだ  
が、そうした人間たちの〈犠牲〉・〈イケニエ〉からより神聖なもの  
として存在し、〈永遠なるもの〉の魅力が増大しているのだと考える。  
この節の冒頭で火の鳥がアイロニカルな存在であると述べたが、火  
の鳥は人類が無意味に命を落とし争うことに落胆しながらも、そう  
いった〈犠牲〉の上に存在しているという両義性をもった人格であ  
るといえるだろう。

## 二 繰り返させるもの

火の鳥を巡る〈犠牲〉・〈イケニエ〉が繰り返されることについて  
先述してきたが、『火の鳥』という作品全体を考えてみると、他に  
も繰り返される事柄が多く見受けられる。

まず作品全体を通して、輪廻転生や生まれ変わりの観念が描かれ  
ていることは、『火の鳥』の各編の物語から読み取れる。『火の鳥』  
の様々な話に登場する猿田という人物は、猿田彦の悪行の影響で来  
世でも酷い目に遭う。「鳳凰編」における茜丸は微生物から亀、そ  
して鳥に生まれ変わる夢をみる。茜丸は死ぬ直前に火の鳥から「お  
まえは死ぬばすぐちいさな虫になって生まれかわるのよ」<sup>21)</sup>と宣告  
される。また「太陽編」に登場する犬上宿禰と狗族の娘マリモは、  
千年以上の時を越えて生まれ変わり、再会し結ばれた。輪廻転生に  
よって人間は一度死に、再び姿かたちを変えてこの世に現れる。こ  
の一度死に、再び生まれるというのは、地球や人類全体にも共通し

ていえることであると考え。もともと手塚の作風として、「スター・システム」という手法を採用している。「スター・システム」については、『TEZUKA OSAMU@WORLD』という手塚のオフィシャルサイトに説明文が掲載されている。

もともとはハリウッド映画で使われていた言葉です。(略)トッブ・スターを中心とした映画製作のことをこう呼び習わすようになりました。

さて、手塚マンガにおける「スター・システム」はと言うと、ハリウッド映画の場合とはちよつと違って、マンガの登場人物をさながら映画俳優のように扱う、ということ。つまりひとりの役者がいろいろな役を演じるように、ひとつのキャラクターがいろいろな役に扮してマンガを演じている、ということです。

(略)手塚マンガはマンガの登場人物を本物の俳優のように考え、自分は監督として彼らに演技をつけることを楽しみにしていたのです。<sup>22)</sup>

猿田彦やマリモのように、作中の言葉や描き方から、明らかに分かる輪廻転生や生まれ変わりもある。だが、この「スター・システム」という手法を利用することで、手塚作品の垣根を越えて、それぞれのキャラクターが常に生まれ変わりを果たしていると考えられないだろうか。猿田彦とお茶の水博士の関係性に注目してみると、『TEZUKA OSAMU@WORLD』には猿田彦について以下のように書かれている。

特徴的な鼻を見れば、お茶の水博士と血のつながりがあるに違いないと思われませんが、お茶の水博士が常に「善なる者」とし

て飄々と微笑んでいるのに対し、猿田のほうは常に過酷な運命に翻弄されながら人間のダークサイドをみつめ続ける、という演技でその実力を示しています。だからひとりの人物の心にある「光」と「影」をお茶の水博士と猿田はふたりで演じ分けているのだとも言えるでしょう。(同)

お茶の水博士と猿田彦は、特徴的で大きな鼻をもっており容貌が似ている。この記述には「お茶の水博士と猿田はふたりで演じ分けている」(同)とあるため、お茶の水博士と猿田がそれぞれ別の人物の輪廻転生として、もう片方の登場人物が登場していると考えられることも可能であろう。猿田という人物が猿田彦として、「黎明編」でクマソの人々を殺し、国を滅ぼした罪や、「未来編」で猿田博士として不完全な人造生物を生み出し、タマミというムーピーを実験材料に使った罪など、様々な罪を重ねてきた。「スター・システム」の一貫として、俳優のように役柄を使い分けている、というののも一理あるだろう。だが、猿田及びお茶の水博士は、生まれ変わり、そういう過去の自分の罪を償うように手塚作品の中で、生まれ変わりを繰り返しているのだといえよう。

登場人物の輪廻転生や生まれ変わりの繰り返しだけではなく、人類的あり方にも繰り返しの構造が見られる。人々の生活に深く関わる〈宗教〉と〈科学〉などがそうである。人類の発展は、〈科学〉の進歩の歴史と共に歩んできた、といっても過言ではないだろう。『火の鳥』の作品中で〈科学〉が発展しきった「未来編」では、人類は一切を地下へ持ち込み、「永遠の都」を作った。「永遠の都」はユーオーク、ピンキング、レングード、ルマルエーズ、およびヤマ



トという五ヶ所が存在し、それぞれのコンピュータによって支配されていた。

全てが科学技術によって構成された世界であるように考えられるが、実はメガロポリス・ヤマトにも《科学》とは一見すると対照的な《宗教》や《神話》の要素が感じられる。メガロポリス・ヤマトは電子頭脳「ハレルヤ」が様々な事柄を判断・決定している。この「ハレルヤ」とは「ヘブライ語で「神を讃めたえよ」の意」旧約聖書詩篇にある語で、キリスト教会の讃美歌に用いられる。喜悅または感謝を表す<sup>23)</sup>言葉である。ヤハとは聖書の神ヤハウェ、ヤハヴェやエホバの短縮形であり、「イスラエル人が崇拜した神。万物の創造主で、宇宙の統治者」(同)の意味がある。西暦三四〇四年という時代に存在する電子頭脳でさえ、キリスト教や聖書といった《宗教》の影響を受けているのである。メガロポリス・ヤマトを含め「永遠の都」が全て消滅した後、ロックはマサトにソドムとゴモラの話をした。「公園に来ていたルンペンにソドムとゴモラの話を聞いたっけなあ」<sup>24)</sup>「ソドムとゴモラってのは聖書にでてる古い町の名だっことだった」(同)「聖書なんてばかばかしいものももう百年近くも前になくなっちゃったが」(同)とロックは語る。だが、「ハレルヤ」という名の電子頭脳が統治している社会で人々が生活していたことから考えると、聖書や《宗教》が表面的になくなったように思えても、《科学》の世界の根底に聖書や《宗教》が根深く存在し、排除できなかったのだろう。電子頭脳の独断で全てが成り立つ社会とは、ファシズムの世界や今日の社会でも見られるトップダウンの様式と酷似している。酷似しているというよりもむしろ、トップダウン様式の極みの状態とも考えられる。現代社会の極み、すなわち《宗教》

を取り除いたように思える未来にも《宗教》の姿は感じ取れるのだ。人々の生活というコンテクストの上で、記号として《宗教》は息づいており、完全に不可欠な存在となったのである。表面的には《宗教》を否定しながら、違和感なく日常生活の中で《宗教》と共存しているのだ。

《科学》や《啓蒙》と《宗教》や《神話》との関係性については、ホルクハイマーとアドルノが『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』の中で、以下のように論じている。

啓蒙の一步一步は、ますます深く神話論と絡まり合う。啓蒙は神話を破壊するために、あらゆる素材を神話から受け取る。そして神話を裁く者でありながら神話の勢力圏内に落ち込んでいく。啓蒙は宿命と応報の過程に報復を加えることによって、その過程から逃れようとする。神話においては、あらゆる出来事は、それが起こったということに対して償いをしなければならぬ。啓蒙においても事情は変らない。<sup>25)</sup>

つまり、《啓蒙》は《神話》を破壊しようと試みるも、《神話》を克服する過程で、《神話》から知恵を授かり、利用しているのだ。これは、結局《啓蒙》や《科学》が成立する下敷きとして、《神話》や《宗教》の存在が不可欠であり、表裏一体の存在であることの裏打ちといっても過言ではないだろう。

そもそも、火の鳥という存在自体が《科学》では説明のつかないものである。しかし、《科学》が発達している社会であったとしても、人類が誕生したばかりの状況であったとしても、常に火の鳥は生物や人類、地球やそれを含めた宇宙を見守ってきた。どのような空間や時代、生物であっても、火の鳥は畏怖や羨望の対象であり、全て

のものを包括するものであった。このようなことから、火の鳥の存在そのものが宗教的、神話的要素を含んでいるのだと考える。結局『火の鳥』という作品全体で〈科学〉や〈啓蒙〉が力を振るっても、〈宗教的〉〈神話的〉な火の鳥は常に世界や宇宙であり、決して克服はできないのだ。火の鳥というキャラクターが〈科学〉と〈宗教〉の表裏一体という関係性の証明なのである。

人類だけではなく、社会や世界そのものも何度も生まれては死に、再び生まれるという現象の繰り返しではないだろうか。角川文庫版『火の鳥』一〇巻から一二巻までにあたる「太陽編」は、二一世紀の話と七世紀頃の話が並行しながら展開している。二一世紀の社会では、火の鳥を守護し、崇める「光」という宗教集団が世界を支配し、「その宗教を信じるか信じないかで信じる者は『光』の一員となり疑問を持つものは『影』のレッテルをはられ『光一族』の命令によって迫害と追放がはじまった」のだ。こうした現状に不満を抱いた『影』グループの達は革命のチャンスを狙っており、中でも猿田彦の生まれかわりと思しき『影』グループの首謀者は、「勝って解放される」ことを切に願っていた。六世紀頃は、大海人皇子が兄である天智天皇の、産土の神々を排除し、仏にばかりすぎる方針に不満を感じていた。「兄君は二言目には仏仏といわれる」<sup>26</sup>「だがこの近江をはじめ畿外の地には産土の神を崇める者もおりますぞ！」（同）「それらをないがしろにしてなにが統一ですか！太平の世ですか！」（同）と、大海人皇子は天智天皇と言いつ争う場面も何箇所が見られた。しかし、物語が終結に向うに連れて、反逆者の立場の人物達が力をつけ、猿田彦の生まれかわりの者や、大海人皇子が天下を獲ることとなった。以前までは人々の解放や、信仰の自由を説いていたはずの

人々が、以前彼らを抑圧し、束縛していた者と同じように権力を振りかざす、新たな社会を誕生させたのだ。猿田彦の生まれかわりと思われる「おやじさん」という人物は、「わしはな光にかわってあたらしい宗教をつくり上げる」<sup>27</sup>「その宗教はわしがつくったのだ全人類をわれわれに従わせるためにな！」（同）と語った。大海人皇子は「わが国は日の本の国の大日本帝国である！そして私は天の神の子天子なのだ（略）私に背くことは天に背くことだっここに致命するっ私の神をあがめぬものは反逆者とみなし断罪するぞ！」<sup>28</sup>と宣言した。

「おやじさん」も「大海人皇子」も理想とする社会の獲得はできたが、かつての自分のような人物の出現を恐れている。独裁的な政治活動を行う「今の自分」の裏に、常に「昔の自分」のような人物の影がつきまとうのだ。理想とする自分の「現在」「未来」を手にしたにもかかわらず、自分の「過去」を思わせる影に怯え続ける、とはなんともアイロニカルなことである。二一世紀の社会も、六世紀頃の社会も、どちらも権力者は新たな実力者に引き摺り下ろされている。新たな権力者は以前の権力者と同じように、〈宗教〉を〈政治〉に持ち込み他者の排斥を行うのだ。先ほど〈宗教〉と〈科学〉の関係性について論じたが、〈宗教〉は〈政治〉の世界にも利用されているのである。「太陽編」の物語において、二一世紀の日本と六世紀の日本を同時に描くことで、人間が常に〈宗教〉・〈科学〉・〈政治〉の三本柱を巧みに操り社会を動かしている構造が明確に示されていた。手塚作品全体を通して〈科学〉と〈宗教〉、とりわけ〈科学〉との密接な関係性が描かれているのである。社会を構成するものとして〈科学〉と〈宗教〉は寄り添うように存在し、『火の鳥』およ

び手塚作品にも繰り返し登場する材料となっているのである。

## 結

これまで『火の鳥』という作品の内包する循環(ループ)について、両義性というテーマで、火の鳥の「生き血」獲得における「自己保存」と「犠牲」について論じた。ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』から贈与論を援用し、交換と犠牲について触れたが、火の鳥の「生き血」はまさに〈交換〉と〈犠牲〉の中立の存在である。火の鳥の「生き血」を飲むことで、人間の「自己保存」を保障しながらも、「自己保存」の危機にさらすというのは、アイロニカルでありながら、「生」と「死」の両義性を含んでいる。火の鳥に対する〈犠牲〉は、岡本太郎が『美の呪力』で述べていた神への〈犠牲〉と似ている。神が神として存在できるのは、人間の血による〈犠牲〉があるからであって、火の鳥が、火の鳥として「宇宙生命」<sup>コスモゾーン</sup>をまとめていられるのは、人間の〈犠牲〉のおかげなのである。そういった火の鳥の「生き血」および、火の鳥の内包する両義性に注目し、『火の鳥』という作品の軸をなす循環(ループ)について論じた。また『火の鳥』の作品に重点を置きながらも、手塚の作風や歴史的な事項にも焦点を当てながら、繰り返しされる事柄についても論じた。手塚は「スター・システム」という独自の方法で、キャラクターを俳優のようにして扱い、キャラクターを自身の作品間で自由に行き来させていたのである。それはまるで輪廻転生のようであり、手塚作品というひとつの世界で人間が何度も生まれ変わっているかのように捉えられる。

このように考えてみると、『火の鳥』から読み取れる循環(ループ)とは現実にもあてはまる循環(ループ)なのではないだろうか。「序」においてアドルノとホルクハイマーの論を扱う理由を、一九三〇年代というファシズム体制下で世界的な危機を批評したからだ、と述べた。実はアドルノとホルクハイマーはドイツ人でありながらも、ユダヤ系の人間であつたのである。ヒトラーのナチスから逃れるように、亡命先のアメリカで『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』を書き記した。〈宗教〉・〈科学〉・〈政治〉を巧みに利用しながら、力を振るつたヒトラーと、それらに距離を置くようにしながらも、米国の大衆文化や反ユダヤ主義を痛烈に批判したアドルノとホルクハイマーは、『火の鳥』の作品と関係ないように思われるかもしれない。しかし、〈宗教〉や〈科学〉の象徴のようなヒトラーやファシズムの動向を静かに、かつ客観的に観察、批評したアドルノとホルクハイマーとは、『火の鳥』を描いた手塚と重ね合わせられる。手塚は「ライフワーク」として長い年月を費やし、『火の鳥』を描き続けていた。いわば集大成である『火の鳥』の世界観は、手塚自身が経験した過去の事柄も反映されているだろう。彼は子供時代に第二次世界大戦も経験し、それから終戦と目覚しく復興してきた日本の様子を見てきた。数十年で急激に変化した世界と日本の中で、彼は社会を動かす独裁者や戦争を行う傲慢な人間たち、〈科学〉の進歩とともに歩む〈宗教〉の存在を意識していたに違いない。アドルノとホルクハイマーが論文を書くことで、主張や批判をしていたように、手塚は漫画を描くことで、彼なりの意見や思想を表現したのである。『火の鳥』とは、彼が長い歳月をかけて、言い換えれば一生を費やし、未来に託すメッセージを発信し続けた作品である、といえるだろう。

手塚が発信したメッセージを受取り、活かしている浦沢直樹のような漫画家もいる。浦沢は幼少期から、手塚の『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』を読んで育ち、漫画家となった。浦沢の作品のテーマは手塚と共通する部分がいくつも見受けられるが、特に『20世紀少年』は「ともだち」という宗教団体が、科学を利用してテロを行いつながりながら、政治の場を独壇場として獲得するなど、『火の鳥』と扱う内容が似ている。『20世紀少年』をはじめとして、浦沢の作品は映画化、ドラマ化、アニメ化など様々な形で加工されている。浦沢は現代の漫画家の中でも、最も人気のある漫画家のうちの一人であり、アングレム国際漫画祭や、手塚治虫文化賞マンガ大賞など、評価を得ている。『火の鳥』をはじめとした作品で、手塚が託したメッセージは形を変えて、現代の漫画家やその作品として脈々と受け継がれているのである。

## 註

- (1) 手塚治虫『火の鳥① 黎明編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）八頁
- (2) 手塚治虫『火の鳥① 黎明編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）一三頁
- (3) 手塚治虫『ヤマト編』『火の鳥③ ヤマト・異形編』角川文庫（二〇〇四年四月二五日）五五頁
- (4) 手塚治虫『ヤマト編』『火の鳥③ ヤマト・異形編』角川文庫（二〇〇四年四月二五日）五八頁
- (5) 手塚治虫『ヤマト編』『火の鳥③ ヤマト・異形編』角川文庫（二〇〇四年四月二五日）一二一頁
- (6) ホルクハイマー／アドルノ『II オデッセウスあるいは神話と啓蒙』『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』岩波文庫（二〇〇七年二月

- (7) 五日）一一一頁  
手塚治虫『宇宙編』『火の鳥⑨ 宇宙・生命編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）一一七頁
- (8) 手塚治虫『宇宙編』『火の鳥⑨ 宇宙・生命編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）一二二頁
- (9) 手塚治虫『異形編』『火の鳥③ ヤマト・異形編』角川文庫（二〇〇四年四月二五日）二六五頁
- (10) 手塚治虫『火の鳥② 未来編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）四九頁
- (11) 手塚治虫『火の鳥② 未来編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）一四四頁
- (12) 手塚治虫『火の鳥② 未来編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）一五二頁
- (13) 岡本太郎『IV 古代の血・現代の血 イケニエ＝宇宙との合体』『美の呪力』新潮文庫（二〇〇四年三月一日）九二頁
- (14) 岡本太郎『IV 古代の血・現代の血 イケニエ＝宇宙との合体』『美の呪力』新潮文庫（二〇〇四年三月一日）九三頁
- (15) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編（下）』角川文庫（二〇〇四年四月三〇日）七五・七六頁
- (16) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編（下）』角川文庫（二〇〇四年四月三〇日）八七頁
- (17) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編（下）』角川文庫（二〇〇四年四月三〇日）九二頁
- (18) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編（下）』角川文庫（二〇〇四年四月三〇日）九〇頁
- (19) 岡本太郎『IV 古代の血・現代の血 イケニエ＝宇宙との合体』『美の呪力』新潮文庫（二〇〇四年三月一日）九四頁
- (20) 手塚治虫『火の鳥② 未来編』角川文庫（二〇〇四年四月五日）二八一頁
- (21) 手塚治虫『火の鳥④ 鳳凰編』角川文庫（二〇〇四年四月三〇

- (22) 日) 三三八頁  
手塚プロダクションオフィシャルサイト「キャラクター名鑑 スターシステム」[TEZUKA OSAMU@WORLD]
- (23) 新村出『広辞苑』岩波書店 一九九八年一月一日 第五版
- (24) 手塚治虫『火の鳥② 未来編』角川文庫 (二〇〇四年四月五日) 一三一頁
- (25) ホルクハイマー／アドルノ「II オデッセウスあるいは神話と啓蒙」『啓蒙の弁証法——哲学的断想——』岩波文庫 (二〇〇七年二月五日) 三六・三七頁
- (26) 手塚治虫『火の鳥⑪ 太陽編 (中)』角川文庫 (二〇〇四年四月三〇日) 九二頁
- (27) 手塚治虫『火の鳥⑪ 太陽編 (中)』角川文庫 (二〇〇四年四月三〇日) 四二頁
- (28) 手塚治虫『火の鳥⑩ 太陽編 (上)』角川文庫 (二〇〇四年四月三〇日) 一八二頁
- (29) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編 (下)』角川文庫 (二〇〇四年四月三〇日) 一九三頁
- (30) 手塚治虫『火の鳥⑫ 太陽編 (下)』角川文庫 (二〇〇四年四月三〇日) 二〇八頁